[エッセイ No.27　花の香りを吸い込むように！]

ここに古い一冊の薄いノートがある。五線譜が書かれている A4 の半分くらいの大きさで、もうほとんどバラバラに“ほぐれて”しまいそうだ。表紙には「Fuer YUMIKO 1976」と、とても読みづらい字で記されている。懐かしさがこみあげて思わず開いてみた。読みにくい、読みにくい！　なぜかというと…。

実はこれ、留学したベルリン音楽大学で師事した「歌の先生」フラウ・グリュンマー、宮廷歌手・エリーザベト・グリュンマー教授から、初めてのレッスンの折に手渡されたもの。初めのころのレッスン内容が、その時々の順に丁寧に手書きで記されてある。先生の時代の人の手書き文字、いわゆる筆記体は今とかなり違う「古めかしい字体」で、私たちにとってはいくつかのアルファベットは、解読するだけでも至難の業だ。

振り返って考えると、先生ご自身で「ノート」を書いてくださるなんて、なんと贅沢な、と思うが、おそらく教えてくださることが、私の拙いドイツ語のせいで「誤解」されないよう、と図解も混ぜて書き記してくださったのだろう。

グリュンマー先生のキャリアは、旧東ドイツのマイニンゲンいう小さな町の劇場で始まった。歌い手としてではなく、舞台俳優として。そしてある日、耳にしたものすごく美しいヴァイオリンの音色に心を惹かれ、劇場のコンサートマスターだったその音色の持ち主と結婚。彼はその後、アーヘンの市立劇場オーケストラのコンサートマスターとなる。

その時、アーヘン歌劇場の総監督だったのが、指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤン。ワーグナーのオペラ「パルジファル」の 3 人の「花の乙女」の役が、まだ一人決まらずに悩んでいたカラヤンは、コンマスのデトレフ・グリュンマー氏に言った。

「君の奥さん、役者だったらしいけど、すごくきれいな声で、脚もきれいだという話じゃない？　もしかしたら『パルジファル』の花の乙女を歌う気はあるかい？　明日オーディションをしたい」（どうやら、脚がもろにでる演出だったらしい。）

そしてカラヤンに「声と脚が気に入られた」グリュンマー先生の、オペラ歌手としてのキャリアが始まり、世界中にその澄んだ歌声が響き渡ることとなる。でもご主人は、第二次世界大戦中、自宅にいたときに敵軍の爆撃を受け、劇場から急いで家に戻った先生の目に映ったのは、瓦礫と化した我が家のみだったと、先生はその時の衝撃を語ってくれた。

私は、実は高校時代にレコードで先生の声に出会っている。芸大受験のために準備していたハイドン作曲のオラトリオ「天地創造」、そのソプラノソロの声の響きの透明さと軽やかさは、今でもよく耳によみがえる。まさかその歌い手に師事できることになるとは、当時は思いもよらなかった。

フラウ・グリュンマーは、オペラではどちらかというと、“軽やか”なソプラノとしてではなく、ドラマティックな表現を得意とする歌い手として有名だったのだが、実際にレッスンを受けると、私の一番初めの印象は全く間違っていなかったことが分かった。表現がドラマティックでも、声の響き自体はあくまでも“軽やか”。70歳近くなっても、銀の鈴のような若々しく透明感に溢れた声を持っていらした。

残念ながら、私がベルリン音楽大学に留学した時には、もう現役を退いていらしたので、舞台上での姿を実際に見ることは叶わなかったが、耳にした話の一つとして、リヒァルト・シュトラウス作曲のオペラ、「バラの騎士」の元帥夫人役を特記しておきたい。

不躾な中年男性との婚約を控えた純真な若い乙女と、彼女に「銀色のバラ」を持っていく使者役の若い男性、彼を愛人としてかわいがっている“熟女”の元帥夫人の3人が織りなす、愛の物語。出会った若い二人は恋に落ち、元帥夫人はいつかは自分が身を引く時の来ることを感じ取っている。最後の方では、互いを見つめ合う若い二人に祝福を与えながら『舞台』を去っていく。心の痛みとあきらめ、やさしさ、そのすべてを歌に込め、片目で微笑み、客席側に向いている片頬の目には涙を見せて、ゆったりと去る姿は「伝説」の名演技と語り継がれている。

先生自身が声楽を習い始めたころは、まだ科学的に分析されたメソードで歌のテクニックを教える時代ではなかったのだろう。グリュンマー先生ご自身も、細かいテクニックというより、イメージトレーニングに近い表現を使って、生徒の想像力を掻き立て、駆使させるレッスンだった。最終的には、それが「自然な形」で声の響きやテクニックに結びついていくことを目指していらしたのだろう。

サクランボの種を舌で3m 先に飛ばすように！

目の奥にはいつも微笑みを！

大好きな人が突然10mくらい先に現れた！

花の香りを鼻からやさしく吸い込むように！

ろうそくの灯を息を長く使ってそっと吹き消そうとするように！

たくさん言われたうち、すぐに思い出すのがこの五つ。初めの 3 つに関しては、あまり「歌のレッスン」と関係ないのでは、と思う人が多いかもしれない。ちょっとだけ説明してみようか。

「サクランボの種」については、自分で試してみると結構難しい。舌先にかなりの力を込めてはじかないと、種は飛ばない。遠くに飛ばそうとすればするほど、唾も飛ぶ。音も強くなる。その「種」を飛ばす、それがドイツ語のTの発音が身につくためのグリュンマー式練習方法だった。もちろん「本物の種」ではないが、イメージであっても3m先まで飛ばすのは大変。舌先の力もいる。そして舌の位置が日本語の場合とずいぶん違うことにも気づく。

もちろんこれはマイクなしの「舞台語」の発音のためで、普段の会話では「サクランボの種を飛ばす」必要はない。因みに、フランス語やイタリア語のTの場合は舌の位置が違うので、「サクランボの種」方式は NG である。

「目の奥の微笑み」は、やさしく幸せな気持ちを表すためではない。やってみると、鼻の奥や顔の上半分、頭頂がクイッと持ち上がる感じがするはずだ。頭蓋骨の間に共鳴空間が広がり、口角も自然に少し上がる。おそらく歌い手なら、誰でも「フムフム！」と思う感覚のはずだが、どうだろう。

さてさてその次は？　生徒に「10 メートルくらい先に、長いこと会いたかった大好きな人が、突然思いがけずひょっこりと顔を出したシーン」を想像させる。そして実際に表現させてみる。

一つ一つの要素もポイントだ。そこで導き出されるであろう「肉体的」な変化を、自分で観察し、自覚することを求められる。長いこと会えなかった大好きな人が、10 mくらい先に突然現れたら、どんな気持ちがするか。

あまりの嬉しい驚きに笑顔と胸がパッと広がって、息が自然に胸郭に入る。これにて歌い手に必要な体の広がりが“自然に”もたらされる、という具合だ。

あとの二つが、呼吸に関することは明白だろう。

「美しい花の香りを、鼻からゆっくりと吸い込むように」。吸った息が、鼻から頭の

前方を巡って、肺が膨らんでいく。そして今度は、「口をとがらせてその息をなるべくゆっくりと吐きながら、目の前にイメージしたろうそくの灯を吹き消そうとする」。腹筋と背筋で体を支えていないと、胸がしぼんでしまうだろう。今はやりの言葉で言い換えれば、「きちんと体幹を保って」息をコントロールする練習だ。

改めて読むと、イメージ作りはいろいろ結構めんどくさそうだが、でもフラウ・グリュンマーが一番大切にされていたのは、「歌う喜び」を伝えるということ。すべてがそこに行きつくためのメソードに過ぎない。

学校の教室での普段のレッスンなのに、いつも「歌の世界」を全身で表現することを求められた。「ユミコ、その右手は何？　何のために動いているの？　それで何をしたいの？」「目つきがマジメ過ぎる！」「あなたは何を伝えたいの？」 あの銀色に輝く澄みきった声がよみがえる。ノートにあるドイツ語の「舞台語発音用」の様々な練習文章、その「内容」のバカバカしさに大笑いをしながら、私の練習の真似をしたベルリンの下宿のおばさんの顔も浮かぶ。

先生の思いやレッスンの思い出がたくさん詰まった小さな「ボロボロノート」、今でも私の大切なお守りだ。